高齢者に対する内視鏡的胃瘻造設術の経験

―胃瘻造設後、胃潰瘍を発生した症例に対しての検討―

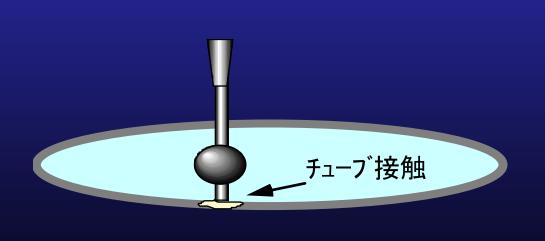
愛知県厚生連海南病院 内科 〇蟹江治郎、河野勤、大澤雅子 早蕨会 福祉村病院 内科 赤津裕康、山本孝之 国立長寿医療研究センター疫学研究部 下方浩史、安藤富士子 名古屋大学老年科学教室 老年科 井口昭久

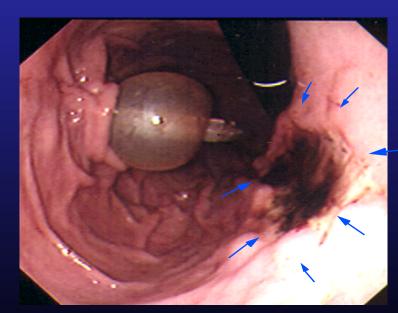
目的

高齢者に対する経皮内視鏡的胃瘻造設術術後に発生する 胃潰瘍の発生原因と増悪因子 に関しての検討

胃潰瘍発生の機序

潰瘍発生部位は、全例がチューブの先端部と胃壁の接触部位
↓
チューブ接触による潰瘍発生を示唆





対象と方法

対象

- 経皮内視鏡的胃瘻造設術後に、 胃内視鏡検査が行われた65歳以上の高齢者症例
- •検査回数81名(平均年齢75.9才、男性27名、女性54名)
- 胃瘻造設後の検査時期は、 術後0-3ヶ月が18名、3-6ヶ月が34名、7ヶ月以後が24名

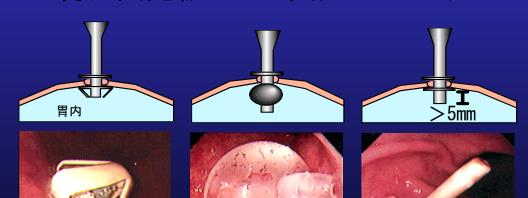
方 法

- ・観察時の胃瘻チューブの先端が、胃内固定板より 突出している群と突出していない群に分類
- ・その各々の群における胃潰瘍発生の頻度と、 H2blocker使用の影響について検討

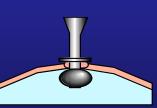
PEGチューブの分類

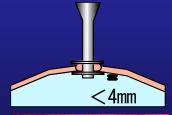
胃内チューブ突出群; 胃内固定板からの突出が5mm以上

胃内チューブ非突出群; 胃内固定板からの突出が5mm未満









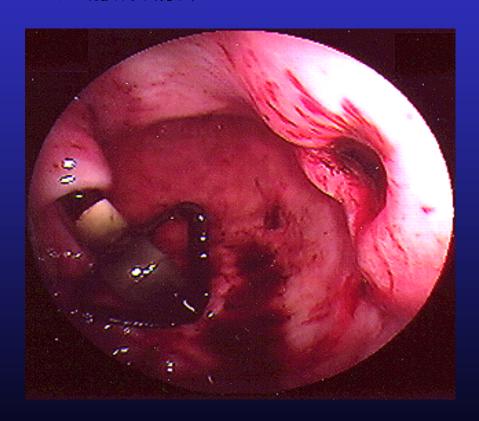


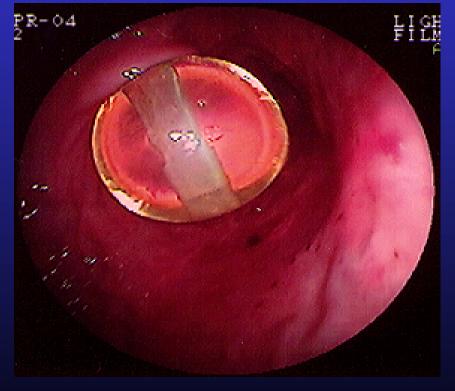




症 例 1

貧血精査目的で胃内視鏡施行。出血性潰瘍を発見。 内服治療及びバルーンチューブへの交換で、瘢痕期となった。



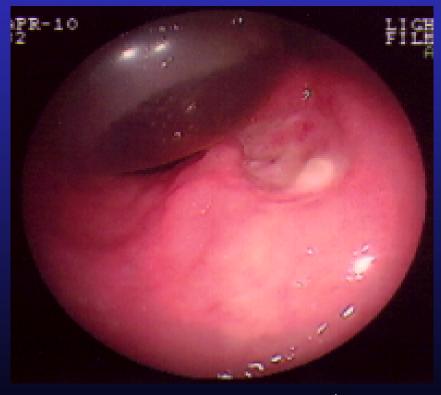


2月11日; Group I チューブ使用

4月4日 ; Group II チューブ使用

症例 2

胃内チューブ突出群の胃瘻チューブにて、経管栄養管理を行っていた。 貧血精査目的で胃内視鏡施行、チューブ接触部に潰瘍を発見。 内服治療のみで治療を行うも貧血進行し再検。 潰瘍の悪化を認めた。



4月4日; Group I チューブ使用



4月16日; Group I チューブ使用

胃内チューブ突出群

```
胃内チューブ突出群非突出群胃潰瘍あり71522胃潰瘍なし155154226676
```

H2 blockerと胃潰瘍の抑制

胃内チューブ非突出群

胃内チューブ突出群

```
H2 blocker使用群非使用群胃潰瘍あり123胃潰瘍なし2615136354
```

H2 blocker使用群非使用群胃潰瘍あり066胃潰瘍なし1151612122

結果

- ・ 経皮内視鏡的胃瘻造設術後に発生する胃潰瘍に対して検討 を行った
- ・ 検査回数は81名で、うち胃潰瘍症例は8名であった
- ・胃内チューブの形状においては、先端突出部の長い型の チューブで、有意に高頻度に胃潰瘍発生をみた
- H2 blockerの予防投与の有用性は確認出来なかった
- 潰瘍発生時にチューブ変更を行わなかった症例は、その後 の内科的治療に抵抗し悪化した

結 論

・胃内先端突出部の長い型のチューブは、胃潰瘍発生の原因となりうる

・ 潰瘍発生時には、内科的治療に加え その時点で挿入しているチューブの変 更または、抜去を行う方がよい